

4 版における改訂内容

改訂箇所	3 版	4 版
p.77, 7 行目	Morgan & Christy 1996	Morgan 1990
p.124, 表 7.1, 1 行目	玉置 2008	Tamaki & Takeuchi 2016
p.141, 7~13 行目	富岡湾干潟（熊本県）では、特定の種の加入量が増えたことで相互作用が激しくなり、種組成が変化したと考えられる事例が報告されている。1980 年代から 1990 年代にかけて、富岡湾の砂質干潟ではハルマンスナモグリが爆発的に増加した。この増加は幼生供給量の増加が原因と考えられている。このスナモグリの大発生により、それまで富岡湾干潟の優占種であったイボキサゴの個体群が消滅した。これにともない、イボキサゴの捕食者であった種やキサゴの貝殻を利用していたヤドカリ類を含む 9 種類の生物が消滅した（玉置 2008）。	富岡湾干潟（熊本県）では、幼生供給が種組成の時間変化に影響する事例が報告されている。この干潟で優占するイボキサゴの個体群は、40 年間に消滅と回復を繰り返した。その消滅はハルマンスナモグリの大発生で底質が不安定化したことに起因し、その回復は、スナモグリの減少と、30 km 離れた本種個体群から幼生が供給されたことが原因であった（Tamaki 2022）。このイボキサゴ個体群の増減に伴い、本種の貝殻を利用するヤドカリ 2 種、および本種を捕食するムシロガイ科の巻貝 2 種の増減も生じていた（Tamaki & Takeuchi 2016）。
p.197, 9~10 行目	2015 年の我が国の総漁獲量は約 460 万トン	2022 年の我が国の総漁獲量は約 390 万トン
p.197, 図 10.2	差し替え	
p.199, 下から 2 行目	2020 年にはわずか 4000 トン	2023 年にはわずか 5000 トン
p.199, 図 10.3	差し替え	

p.232, 23~24 行目	<p>玉置昭夫 (2008) 局所群集からメタ群集を組み立てる：海洋ベントスから考える。大串隆之・近藤倫生・野田隆史 (編) シリーズ群集生態学 5 メタ群集と空間スケール。京都大学学術出版会 pp87-111</p>	<p>Tamaki A (2022) Applicability of the source-sink population concept to marine intertidal macro-invertebrates with planktonic larval stages. <i>Ecol Res</i> 38:4-41</p> <p>Tamaki A, Takeuchi S (2016) Persistence, extinction, and recolonization of an epibenthic gastropod population on an intertidal sandflat: 35-y contingent history of a key species of the benthic community in metapopulation and metacommunity contexts. <i>J Shellfish Res</i> 35:921-967</p>
p.237, 下から 3 行目 ~p.238, 1 行目	<p>農林水産省 (1956-2020) 海面漁業生産統計調査。 https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kaimen_gyosei/index.html (2022/4/14 確認)</p> <p>農林水産省 (1956-2020) 農林水産物輸出入概況。 https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kokusai/index.html (2022/4/14 確認)</p>	<p>農林水産省 (1956-2023) 海面漁業生産統計調査。 https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kaimen_gyosei/ (2024/12/23 確認)</p> <p>農林水産省 (1956-2023) 農林水産物輸出入情報・概況。 https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kokusai/#r (2024/12/23 確認)</p>